

## 第 22 回健康スポーツ部会における主な意見

**<議題（1）障害者スポーツ振興ワーキンググループ中間まとめについて>**

- パラリンピックで障害者スポーツに関心が集まったが、施設が不十分などの課題もあった。拠点を作り、手の届くところへ支援を進めていくことは重要。医療機関では障害者と関わることも多いが、スポーツ医などが障害者と関わる際、具体的な支援ができていないと感じる。地域で受入れ体制があることを医療関係者にも十分に周知いただき、一步一步、丁寧に進めて欲しい。
- センターの機能整備だけではなく、住民も一緒に楽しめるよう、施設を利用する住民の意識も大切。スポーツに限らず、行政と住民で軋轢が起きるようなこともあるが、これからは住民や施設の利用者も学び、理解をいただき、自分事化して考えられるようになることが重要。地域での話し合いと医療関係者への周知をお願いしたい。
- 「障害者スポーツセンター」の名称は、一般の方がその拠点の機能がより分かりやすいような名称にすべきではないか。
- センターにおいて重要なのはハブ機能だと考える。身近なところで障害者がどうしていいかわからない、差別を感じてしまう、受入れ側もどうしていいかわからず、誤解につながることもある。東京都が特別に進んでいる面もあるが、お金のかからないソフト面の対応の仕方が発信されており、各都道府県にそのような指導ができるとうところが良い。
- 中間まとめは、ハブ施設やサテライトが、点ではなく面でつながっていくようネットワーク作りに取り組んでいく趣旨と理解。障害者は軽度・重度、年齢も様々であり、それらに対応できることも重要。

**<議題（2）目的を持った運動・スポーツの実施について>**

- ライフパフォーマンスが求める体力水準は何か。個人の生活パターンに応じて、どういった体力要素や体力レベルが求められているかを整理すべき。4つの身体機能（筋骨格系・神経系・メンタル系・呼吸循環・内分泌代謝系）が整っていない場合でも、もう少しここを強化したい、など個人がやりたいことと水準とのギャップで進めるべき運動が変わってくるため、それらが整理されると迷いがなくなる。セルフチェックや体力テストが身近に取り入れられることも望まれる。
- 指導者が適切に助言でき、プログラムを提供できることが重要。共通理解としてしっかり整理されるとわかりやすい。効果を謳っている運動プログラムの中にも、エビデンスがないものもあり、目的を持った運動・スポーツも普及する中で、適切な情報発信をしないと過大な期待をさせてしまうこともある。今後推進のための対応策（ロードマップ）の中で令和5年度以降の取組も重要であり、いつまでに、どのような状態になっていきたいかを見据えて施策を進めるべき。

- スポーツの効果や価値について説明する場合、多角的視点やエビデンスを活用して欲しい。推進するには人材が課題となる。自治体関係向けにもどのように発信し、広めてもらうのが重要。第一印象として「関係ない」と思われないための巻き込むような情報発信が必要。
- 単にスポーツをすれば良いという発想から、アウトカムに資するようなスポーツの発想になった。目的を持った運動・スポーツは色々な取り上げ方がある中で、「ライフパフォーマンス」を周知できるかが一番重要。推進のための対応策は、現状は色々読めるが今後具体化できるようにすべき。
- スポーツ基本計画作成時にも議論になったが、スポーツの目的の捉え方について、今回の案ではスポーツの目的がいわゆる身体づくりや体力づくり、健康の維持増進に偏り過ぎているように感じる。友達と時間を過ごすことや人間関係作りといった「目的」は、目的を持ったスポーツ活動とはならないのか。様々な楽しさがあり、だからスポーツが続けられるということについて前文等で少なくとも触れておくべき。

### **<議題（3）現場・視察ヒアリング及びガイドブックについて>**

#### **（視察視察 ①東京都足立区 ②コナミスポーツ(株) ③（一社）parkrun Japan）**

- 足立区では、首長のリーダーシップで EBPM を推進しており、データも独自にとっている。LINE を活用してかなりのサンプル数を集め、データ収集に取り組んでいる。
- コナミスポーツは、官民連携（PPP）で施設運営されているが、民間ならではのノウハウ等が活かされている。全国に展開していくうえで重要な取組であり、官民学の連携の好事例。
- パークランのウォーキングイベントは、地方によっては困難な部分もあるが、参加者が完全無料で取り組めるのは素晴らしい。

（以上）